

「神薬」びん年代解説

明治7年「西洋薬舗會社資生堂」が解散して三井組に買い取られ、「三井資生堂」となった。その店舗が本町1丁目にあったことから「本町資生堂」とも呼ばれ、また店舗が明治13年（1880年）に室町に移ったため「室町資生堂」とも呼ばれるようになった。

次に三井銀行副長であった西邑席四郎にしむらとらしろうの手から三井銀行台湾支店長であった中田銀次郎に移り、店舗も「室町3丁目」から「日本橋区本石町」に移った。明治30年代から40年代にかけて日本橋区本石町に存在した中田銀次郎経営の「資生堂」所謂「中田資生堂」のびんが包装箱に入ったままの状態いおぼろで効能書とともに発見されている。

「東京市日本橋区本石町3丁目12番地」経営者は「中田銀三郎」とあるが、中田銀三郎とは中田銀次郎の近親者でもあったと憶測される。大正期に入り「中田資生堂」の営業権は後述する新田長治郎の「新田資生堂」に移ったものと考えられる。

「本統神薬」、「佐藤尚中方剂」新田長治郎の「資生堂」所謂「新田資生堂」のびんも包装箱に収められた状態で効能書とともに発見された。

佐藤尚中が明治15年（1882年）に没しているが、本統神薬、百調湯本舗、資生堂新田長治郎商店となっており、大正8年から昭和10年代のことである。